

『滿洲國』の通俗文學

——雜誌『麒麟』を例として——

李 青

はじめに

二十世紀の三、四十年代は中日兩國において、もつとも激動した時代であつたと言える。三一年の『滿洲事變』^①（中國では『九一八事變』^②といふ）から、三七年の『日支事變』^③（中國では『盧溝橋事變』）をきつかけに、中日間はついに全面戦争に突入し、中國領土の大半は、瞬く間に陥落してしまつた。

日本との戦いはもはや急務となつてきた。しかし、複雑な政治情勢を呈する中で、いかにして文學の陣地を獲得するかが、當時の中國政治の重要な特徴の一つになつてゐる。堂々たる抗日文學もあれば、政治を避け、風月や人文の快樂をひたすらに謳う娛樂文學もあつた。非常時代といえども、自分なりのイデオロギーを示しながら、独自の立場を表明してゐた。

本論文では日本の傀儡國家『滿洲國』で發生した通俗文學に着目した。これまで『滿洲文學』（中國で東北淪陷期文學と稱する）を研究する際に、「いかに抗日的な要素があるか」という側面からの研究が重視されてきた。特に中國大陸では政治的イデオロギーの影響で、『滿洲』で發生した通俗文學は、文學として認めなかつたり、あるいは、對日協力文學として、顧みられていない。

筆者は最近影印複製された大衆文學雜誌『麒麟』を例として、『滿洲

國』時代の通俗文學の實像に迫つてみたいと考える。占領下における東北地方の通俗文學はいかなるものなのかを知ることによつて、『滿洲國』の實像は新たな側面からより鮮明に現されることであろう。

第一章 雜誌『麒麟』の誕生

一、通俗文學とは何か

通俗文學とは、時代の主流イデオロギーを代表することができず、はつきりとした文學の立脚点を持たず、政治を語らない、娛樂を目的とした文學である。

中國の通俗文學は魏晉時代の志怪小説から始まり、唐宋時代に徐々に成熟しながら、明清時代にもつとも繁榮する時代を迎える。通俗文學の概念は古くからあることがわかる。けれども、新文學運動以來、文學は常に進歩的な内容が求められ、通俗文學は傍流となつた。

五・四新文學の提唱者である胡適や周作人などは通俗文學などに独自の見方を示している。

胡適は「五十年中國文學的變遷大勢」の中で以下のように述べている。^④

清末になると南方の文人も多くの小説を書いた。劉鄂の『老殘遊記』、

李伯元の『官場現形記』、『文明小史』、吳沃堯の『二十年目睹之怪現狀』、『恨海』、『九命奇冤』などはいずれも有意義な作品である。これら作品の情緒と見解は人々に娯樂ばかり提供する北方の民間文學の作品とは大きく異なる。南北の白話小説はこの五十年間中國文學の最高作品であり、もつとも文學價值のある作品である。この段階の小説發達史はいわゆる中國の「生きた文學」の自然の流れである。

胡適は南北の通俗小説について、北方は娯樂的な要素が強いことに對して、南方は政治的な側面、教訓色が強いと兩斷した。

一方、周作人は「中國新文學的源流」の中で、通俗文學の重要性を強調している。

このごろ人々はみな共通の癖がある。つまり、學校で研究しているものにしても、個人が讀んでいるものにしても、あるいは、文學史で注目している項目でも、大半は、狹義の文學に陥っている。要するに、純文學である。文學はあたかも山のようにである。まずは山の圖を描いてみよう。われわれが目下、偏っている純文學は、この山のほんの一部分にすぎない。(中略)通俗文學は原始文學より少し進化している。純文學の影響を受け、下級文人によつて創作されたものである。官僚と士大夫をめぐつて官位が高く金持ちになるというストーリーがまざっている。『三國志演義』、『水滸傳』、『七俠五義』及び大鼓書の臺本はいずれもそうである。

中國社會にもつとも影響を及ぼしているのは、孔子でも老子でも純文學でもなく道教(老莊の道家ではない)と通俗文學である。故に中國文學を研究する際に、通俗文學を顧みないわけにはいかないのである。

胡適と周作人は五・四新文學運動をもつとも擁護していた人物である。その二人があえて通俗文學を首肯したわけは、その大衆への影響力の大きさ、内容のわかりやすさからではないだろうか。

二. 『麒麟』の誕生と「滿洲國」

『滿洲事變』(九一八事變)の翌年、實質は日本人統治の「滿洲國」が建國された。文藝政策は文筆者に「滿洲國」の協力者を、強制する形となった。

一九四一年に中國人作家の間ではもつと恐れられている「八不主義」と稱する、新聞や雑誌に掲載不可な事項八點を公布した。一. 時局に逆らう傾向のあるもの、二. 國策に對する批評は誠實さに欠け、かつ非建設的意見のもの、三. 民族對立を煽るもの、四. 建國前後の暗黒面の指摘を目的とするもの、五. 退廢的な思想を主題とするもの、六. 戀愛を描寫する際に、三角關係や貞操を輕視する戀愛ゲーム、情欲、變態性欲、または情死、亂倫、不倫を描寫するもの、七. 犯罪を描く際に、露骨な殘虐行爲と過度の刺激場面を描寫したもの、八. 女中や酌婦を主題とし、歡樂街の世態人情を誇張したもの、である。

この規定は作者を律したばかりでなく、編輯者に對しても同じであった。創作と出版はもはや多くの人に恐怖感を与え、文藝創作はいつそう厳しいものとなった。文人にとつては、「滿洲國」を贊美し、粉飾するしか、殘された道はなくなつたのである。

同年二十三日、『藝文指導要綱』が打ちだされ、「政府」の文藝路線が、より制度化されるようになった。戰時體制に合わせ、強制的に文筆業に従事する者を網羅し、全「滿洲國」の文藝組織が「政府」の監視下に置かれた。このような環境の下で、抗日的な作品または社會の暗黒面を暴

露する作品の掲載は不可能となり、紙面には國策に順應する文學が多く現れるようになった。しかし、作家や編集者が必ずしも「文藝政策」を忠實に実行したかといえないことが多かった。「國策文學」のすぎをねらって、本流はずれた「通俗文學」の道に方向變換することは可能だった。このような情勢の下で「滿洲國」では、政治を語らず、時代の政治環境を離れた通俗文學が靜かに流行しはじめたことは容易に理解できる。

一連の文藝政策の登場とあいまって、雑誌『麒麟』が一九四一年六月に「滿洲國雜誌社」から誕生したのである。

三. 『麒麟』の内容と構成

雑誌『麒麟』にはじめて觸れたのは十數年前であった。コピーされた一冊のみだけであった。本格的に通讀したのは、全國圖書館文獻縮微複製中心から複製版が出たこの夏(二〇〇六年)のことである。ゆえに筆者はこの複製版をテキストとする。

『麒麟』創刊號の扉からわかるように、本雑誌は大型畫報『斯民』から改題したものである。創刊號は康徳八年(一九四一年)六月であり、終刊號は康徳十二年(一九四五年)二月である。五年間も存続し、合計四十四冊を出版した。分量は一定しておらず、たいがい百六十頁から百八十頁ほどである。終刊間近になると、頁数が徐々に少なくなり、最終回はたった八十頁だけであった。編輯者は前後に三人の人が関わった。それは、趙孟園(小松)、劉玉璋(疑遲)、金純斌である。發行人は前後の順から、顧成運、唐則堯、黃曼秋、滿洲雜誌社、清野剛である。發行所は「滿洲雜誌社」である。

思想統制の厳しいこの時期に雑誌『麒麟』を世に問うことができたのは、當然強いバックがあったからこそ、できたと考えるのが妥當である

う。發行所の「滿洲雜誌社」が、その證明になるだろう。「滿洲雜誌社」は日本とのかかわりの深い出版社である。日本大手の「大陸講談社」の滿洲分社にあたる。このような機關から雑誌を出版するならば、政府の政策の代辯者になるのは言うまでもない。けれども、編輯者や執筆者などを見ると、ほとんど中國人であることが分かる。特に編輯人の趙夢園(小松)と劉玉璋(疑遲)の二人は「滿洲文壇」の「藝文志派」の主要メンバーである。彼らの考えや嗜好が雑誌の趣きを左右したことも十分ありと考えられる。

雑誌は國策を宣傳する使命を請け負うかたわら、紙面の大部分に通俗文學および大衆文學の關心が集まる日常生活のこまごました雑事に紙幅を費やしている。氣輕で簡単に讀めることから、庶民段階の人々を對象とする「大衆娛樂」雑誌であると位置付けてもよからう。發刊の辭を見れば、その主旨がよくわかるだろう。

『麒麟』は四千萬人の民衆が情操を培うために發行したものである。この信念は朝野各位の賛同を集まることによつて、われわれの自信がいつそう強くなつた。國民の皆さんは『麒麟』を自分たちの雑誌だと思つてくださると確信している。われわれは諸賢の知恵を借りて、すべての努力に貢獻し、雑誌を立派に運営したいと考えている。この雑誌を讀めば、精神が慰められ、情操が向上する、人々に尊敬される國民になれるだろう。われわれはそれを心より期待している。

發刊の辭では、雑誌は國民の雑誌であることを強調し、しかもこの雑誌を讀んでもらうことによつて、情操を磨くことをねらいの一つにしている。「四千萬人の情操を培う」のに、「もつとも通俗的な文學を用い、もつとも面白いのある内容を目指すのが、本刊の一貫した方針だ」と創刊號

の『編輯後記』^⑤にも同様の趣旨が記されている。

雑誌『麒麟』は四千萬人の國民を獲得するために、雑誌の娯樂性を強調するために、工夫を凝らした。まず雑誌の表紙は「滿洲」女優や美しい若い娘の肖像で飾り、人目を引いた。どの號でも最初にカラフルな廣告を掲載するのがもう一つの工夫である。創刊號を例にとってみると、冒頭の三十四頁を廣告に費やしている。なかなか面白いものもある。化粧品もあれば、薬もある。女優の肖像畫もあれば、漫畫もある。無論、社會情勢を反映した「皇軍戰勝」の寫眞や政策宣傳のものもある。

一方で、經濟利益の追求も感じられる。第一卷第七期に販賣所を増やす廣告があった。書店を主心に販賣していたが、映畫館、各デパート及び主な驛でも販賣することになった。第一卷第八期（四一年新年特大號）の編輯後記に「創刊以來、國內と日本において、好評を博している。發行部數は一擧に十萬部を突破した」との記述がある。『麒麟』雑誌は國內のほかに、「親邦」日本の讀者をも視野に入れていことがわかる。

以下、每號に共通する主な内容を紹介したい。

雑誌『麒麟』の内容はきまづいたコラムを特に設けることもなく、前半部分はほぼ通俗文學で占められている。創刊號は華北で名をはせる通俗小説作家劉雲若の言情小説（戀愛小説）『廻風舞柳記』、白羽の俠客小説『魔雲手』、楊六郎の『燕子李三』、東北地方の通俗小説家趙恂九の言情長編『夢斷花殘』などによって、スタートを切った。文學のコナーには、短篇小説や外國作品の翻譯、讀者による取材の記事などがある。このほかに編輯部が情勢の變化に應じて、座談會や評論の記事を掲載した。特徴としては號ごとに巻頭語が必ずあり、毎回一つの話題について、短い論説が掲載される。巻頭に對して、巻末に「編輯後記」がある。そのつどさまざまな情報を提供した。

編輯部は上からの命令を貫徹するかたわら、「麒麟新聞」というコラム

も掲載している。創刊號を例としてみると、①趣味版（趣味や社會の話題）、②珍聞版（珍しい出來事、怪聞など）、③幽默版（ユーモア、笑い話）、④藝文版（政治動向、文人の動き、政策解釋）などがある。どの話題も短く、一般讀者に比較的わかりやすい。編輯部主催の日本語講座は毎回あった。

四・雑誌『麒麟』の執筆者の顔ぶれ

前述のように、「滿洲雜誌社」は日本本土の大手出版社とのつながりがあった。政府の支援で豊富な資金を擁していることは容易に想像できる。雑誌の宣傳効果のほかに、經濟利益をも求められることは經營者にとっては當然のことである。

雑誌に登場する執筆者は實に廣範圍にわたる。地元の中國人、日本人以外に、華北地域の作家の参加も目立っている。當時は華北地域の通俗文學の水準が高いと言われた。華北の作家の參與はまさに『麒麟』に錦上に花を添えることになった。雑誌に登場した劉雲若、趙煥亭、白羽、陳楨言、耿小的、亞南、楊六郎、王雪倩、徐春羽などは、中國全土においても名の知られている通俗文學作家である。『麒麟』を質的に向上させたのは間違いない。『麒麟』の第二卷第十二期（一九四二年）のコラム『麒麟電臺』には以下のような記述がある。^⑥

本社編輯次長劉玉璋氏は十月二十三日に汽車で華北へ出張に出かけた。北京、天津の各作家と連絡を取り、長編小説と雜文の執筆を依頼した。來月の新年號は異彩を放つことが期待される。

編輯トップの劉玉璋自らが華北まで出向いて、原稿を求めた事實からも、『麒麟』がいかにブランド作家の參與を重視していたかがわかる。

華北作家の參與は通俗作家のみにとどまらず、新文學作家の謝叢集、

蘇捷、高柄章、陳逸飛、周作人なども登場している。そのうちで、周作人の存在は格別のものである。第一卷第八期（一九四二年）の新年特大號に周作人は華北教育總署督辦として『新年題辭』¹²を寄せた。さらに第二卷第七期（一九四二年）に「東亞文化一元論」¹³（建國大學講演速記原稿）を掲載した。

地元作家の参加は多岐にわたっている。通俗文學作家としてすでに大家として認められた趙恂九、穆儒丐、李北川、李冉、睨空、任情、田菱、凌華、尼耶などがいた。若手の小説家も應募という形で、頭角を現し始める。胡人、王一、公幸策、振堯、耿介、唐彩夢、楊天風などである。次は純文學の創作で知られる古丁、爵青、杜白雨、勵行健など『藝文志派』同人、『文叢派』同人の吳瑛、吳郎、金音、冷歌、『作風派』同人の也麗、成弦なども積極的に参加し、雑誌の品位を向上させた。このほかに、讀者の目を引きやすい知識的紹介文や生活の知恵に關する文章も多い。これらのものは身近な話題を提供し、妙趣に富んでおり、面白く讀める。このひとまとまりに登場したのは、少虬、金小天、文則、四郎、劉漢、翠羽、匡盧などである。

地元の男性作家のほか、女性作家の活躍も活発である。雑誌全體の構造から見れば、主婦や、知的女性などに「育兒知識」や「お嬢様教科書」、「女性はどのように夫を助けるか」など意圖的に女性に話題を提供している。

スター兼作家の楊絮は雑誌のレギュラーメンバーであり、彼女は『麒麟』誌上に質の高い八編もの作品を發表した。楊絮は女優も兼ねた身分であるゆえに一舉手一投足が注目されている。彼女の結婚式は『麒麟』（一九四三年、第三卷第二期）で『雜誌中繼』という形で大々的に報道された。

女性作家のために三度の特集を組んだことがある。「秋の花―全國女性

執筆者特輯」（一九四一年、第一卷第四期）、「女性家掌篇特輯」（一九四二年、第二卷第十期）、「女性新人創作展・決戰掌篇」（一九四五年、第五卷第一期）である。楊絮、吳瑛、梅娘、左蒂、璇玲、瀾光、銀燕、乞女、鄂嵐、乙梅、北黛、羽倩、柳憶、白萍、佩珠、冬屹、蕭黛などが、よく登場した女流作家である。

最後に日系文人に觸れよう。通俗雑誌であるからか、日系文人の活躍は中國人よりかなり劣る。關係のある作家といえば、日向伸夫、遣田研一、八木橋雄次郎、大内隆雄、海野廣三などである。ノンフィクション作家には廣野道太郎、宮崎世龍、野口依太郎などがいた。甘粕正彦も『滿洲雜誌社』社長として、雑誌を激勵することを兼ねて國策宣傳訓示のような文章も寄せた。

第二章 『麒麟』に現れた通俗文學

一、言情、實話、祕話小説

雑誌『麒麟』の中では「言情」小説（戀愛小説）が量的に一番多い。長編言情小説の連載は雑誌の終刊まで續いていた。華北の言情小説の大家などの参加もあり、この部分の小説は藝術性が比較的高い。「言情」小説はさらに細かく分けることができる。「純情小説」、「艶情小説」、「哀情小説」、「綺情小説」などである。さまざまな手法で、男女の別れとめぐり合いを描き出した。

華北作家劉雲若が書いた『廻風舞柳記』（一九四一年、第一卷創刊號〜一九四二年、第二卷第四期）は、特に注目すべき一編である。ストーリーは踊り子柳眉の出自をめぐる複雑な人間關係を、巧みかつ完璧に描いた。紆餘曲折の物語は讀後も餘韻が残る。

趙洵九は創刊號で華北通俗作家の劉雲若、白羽、楊六郎などと並んで、堂堂たるデビューを果たした地方作家である。地元の作家を宣傳するためであろう、「滿州では唯一の大衆小説家である」と紹介されている。彼の『夢斷花殘』（一九四二年、第一卷創刊號〜一九四二年、第十卷第七期）は東北特有の言葉と表現手法で、中學を卒業した黃素秋の戀愛が起伏ある過程を経て、ハッピーエンドという結末を迎える筋書きである。

地元文壇の宿將で『盛京時報』の主筆である穆儒丐も『哀情小説』『新婚別』を書き、周囲の注意を集めていた。青年軍官が故郷に戻り、結婚をした。しかし、結婚して三日たち、すぐに部隊に戻らなければならなかった。愛する新妻、病弱な母親に別れを告げる。戦亂でついに音信不通となってしまう。作者はストーリーの複雑さは特筆せず、離別の悲哀を焦點にして筆を振るうことで、讀者に感動を與えた。

實話、祕話の小説も多い。これらの小説は實生活に起こったことを題材に、ストーリーが充實していることや内容の面白さ、謎めいた箇所を描寫などを重視している。東北地元のでき事を元に、東北の森林とか、變化に富む自然環境を書き加え、故事や傳説などと一體化したものである。

東北で發生した凶悪事件を取り上げる小説もずいぶんある。例えば、胡來『一氣に三人の命を奪った』（一九四一年、第一卷第四期）、若怯『梨花浴血記』（一九四一年、第一卷第七期）、斯琪『平定橋殘案』（一九四二年、第二卷第十二期）などである。

有名人のプライバシーを披露するものも見られる。例えば、宮崎世龍『蔣介石與藍衣社』（重光譯、一九四二年、第二卷第八期）、司馬還『楊宇霆之死』（一九四三年、第三卷第一期）、王峰『宋美齡艷史』（一九四二年、第二卷第十一期）、白素傑『吳素秋』（一九四二年、第二卷第七期）、田菱『女匪駝龍』（一九四一年、第一卷第五期）などである。ささいな出來事や有名

人のプライバシーに對する記述のなかにはフィクションが含まれており、文學的な價值が低い。しかし、『滿州國』の實話の中にある『實』の部分を書くことによつて、たとえ百パーセントが實話とは言えないにしても、非常に大切な記述であろうと思われる。

宮崎世龍が著した『極惡非道の藍衣社』（松吉譯、一九四二年、第二卷第七期）、『蔣介石と藍衣社』（重光譯、一九四二年、第二卷第八期）、神龍『ソロモン大海戰』（一九四二年、第二卷第十一期）柳如是『英宮小史』（一九四二年、第二卷第六期）、海野十三作『ハワイ海戰記』（耳東譯、一九四二年、第二卷第四期）などの一群の作品がある。これらの作品は時局の烙印の強い作品である。題名からして創作の目的がはっきりしており、かつ作品から現れた思想は國策と一致しなければならぬ。

『極惡非道の藍衣社』と『蔣介石と藍衣社』には國民黨が登場する。生き生きとしたストーリーを通じて戦場で日本と戦っている國民黨を揶揄している。英米との戦いに關する時事小説は、いずれも戦況報告のようなものであり、英米殲滅する皇軍の戦績を贊美している。この部分の執筆者は日本人によるものが多い。

2. 『藝文志派』作家の活躍

『藝文志派』作家は『滿州文壇』でもっとも名の知られているグループである。文學の業績が拔きんでているほか、當局と親しい關係にあつた。『麒麟』の編輯に深く關つた劉玉璋（疑遲）と趙孟園（小松）はともに『藝文志派』の主要メンバーである。彼らは社會の暗黒面を暴露したり、苦悶している知識人を描いたりしている。『滿州國』の歪みを指摘するとされた話題作が多いなかで、當局が主催する刊行物で主要な役目を果たしたこともまた事實である。

仲間の古丁と爵青の登場は『麒麟』に知名度アップをもたらした。こ

ここでは二人の「史材小説」に觸れてみたい。「史材小説」は「歴史小説」と異なり、スケールの大きな場面描寫もなく、ある特定の時代と人物を取り上げ、中編または短編という形を用いる。たった四百字だけのミニ小説もあった。「史材小説」はある歴史人物、時代背景を借りて、作者自身の書きたい内容をストーリーに隠す形で表現している。

まず古丁の「史材小説」「竹林」を見てみよう。古丁は「藝文志派」ではトップクラスの存在であり、始終純文學のみ創作する姿勢を貫いていた。彼は作品を『明々』（一九三七年—一九三九年）、『藝文志』（一九三九年—一九四二年）などの刊行物でしか発表しなかった。弧高を標榜する作家であることで有名だった。大衆雑誌に通俗文學の原稿を寄せることはきわめてまれなことだった。仲間の劉玉璋の要請を固辭できずに應じたのだろうか。今は推測するしかすべがない。『竹林』は（一九四二年、第二卷第六期）に發表された。

小説は短篇である。西晉の竹林七賢は統治者に合流せず、世塵を避けて、清談を事とした。古丁は諷諭の手法で、竹林七賢の複雑な心理状態を描いた。小説は主に嵇康を中心に展開する。文章をろくに書かず、鍛造に没頭する嵇康は「上半身は裸になり、アバラ骨が突き出ている。七尺八寸の體を曝け出して、まるでやせこけたらくだのようだ……嵇康は鬱病を患っている」^⑬。有力者の鐘會將軍が訪ねに來ても、傍若無人の態度を變えなかった。精神状態は悪いが、決して權勢に媚びない嵇康であった。やがて、竹林七賢は離散し、嵇康はいつそう憂鬱になった。あげくに、冤罪をかぶせられ、處刑された。「この一生涯に大きな聲で話したことのない、怒るとすぐ赤面する才子は、このように悲劇の一生を終えた」^⑭と、古丁は嵇康に無限な同情を寄せた。

古丁は何故竹林七賢という歴史人物を敢えて書こうとしたのだろうか。嵇康のすることなすことを通じて、古丁は何を表現しようとしていたの

だろうか。これらの問題は古丁研究者の間では常に議論の要點の一つになつてゐる。

古丁は「滿州國」時代に中國人作家の中では、一番名の知られている一人である。日本語が堪能なため、日本文人との交流や當局者とも親密に往來していた。文藝各部門の役職には古丁の名前が頻繁に現れる。

このような特別な身分を有する古丁にとつて、「滿州國」は息苦しいところはなかつたのだろうか。反抗意識はなかつたのだろうか。筆者は古丁に「漢奸文人」とか「抗日分子」とかのように安易な結論を出したくない。古丁という人物は、ある意味においては白黒の答えを出しにくい作家ではないかと思つてゐる。

作品の中では、竹林七賢は社會とまったく相容れず、俗世から身を隠すことを選択することにおいて、社會と對抗している。ここでは知識人と社會とかわりの問題を提起している。要するに、知識人は社會環境とうまく調和が取れない場合の處世術はいかなるものかという問題であろうと思われる。これは「滿州國」という特別な社會環境下で、知識人たちが直面した問題であつたばかりでなく、古丁自身が一番苦惱していた問題であつたはずである。

「滿州國」はあくまでも千五百年前の西晉と事情が異なる。「滿州國」の場合には外敵に占領されており、すでに統治システムが整つていた。反感を持つてゐる知識人たちは内心の反抗を表すのに、旗を揚げて立ち上ることなど當然許されることではない。大膽な反日文筆活動も不可能であつた。知識人の反抗形式は「嵇康式」を取らなければ、「面從腹背」するしかなかつた。

古丁が描いた隱遁生活を送つてゐる嵇康は鍛造に没頭したり、學問をやめたり、避世的な道教を求めたりした。それでも嵇康の焦慮、魂の平安はいつこうに改善されることはなかつた。結局のところ、たどりつ

たのは破滅であった。

古丁にとって嵇康の生き方はまねすべきことではないと判断したのだろうか。古丁ははつきりと答えを出さなかった。『滿州國』時代の古丁の言動を見ても、嵇康と違った處世術を取ったことは明白である。隱遁生活を選択していなかったのは、自分の知識人としての存在價值を捨てがたかったからにちがいない。

彼は雑誌『明々』時代から『寫眞印』の創作方針を打ち出した。それは主張と主義を問わずに、多く書くことと印刷することである。この意志は後の『藝文志』時代まで貫かれた。嵇康は社會に背を向け、筆を折る姿勢を取ったが、古丁は社會に接しながら、創作にこだわりつづけていた。多く書くことや印刷することによって、心の安らぎを求めていたのかもしれない。古丁にとっては、創作することこそ、作家の本當の價値が實現できると考え、『滿州國』の表舞臺で活躍を敢行したのだろう。

『竹林』は古丁作品の中では、傑作である。藝術風格は熟練しており、揶揄の筆致で、ユーモアがある。通俗作品として登場していたため、ストーリー性が強くて、言葉が分かりやすい。古丁の『麒麟』への參與、および『竹林』の發表は『麒麟』雑誌に高い信望を集めたといえよう。

古丁のほかに、もう一人『藝文志派』メンバーの爵青が『麒麟』に登場した。彼は『麒麟』に小説三篇と翻譯一篇を發表した。それは言情小説の『戀獄』(一九四三年、第三卷第六期)、史料小説『長安城の憂鬱』(一九四二年、第二卷第八期)、『司馬遷』(一九四三、第三卷第八期)、翻譯『ファウスト』(一九四二年、第二卷第四期)である。

爵青は文壇の『鬼才』といわれているほど文學の才能がある。古丁と同じく、知識人であり、『滿州國』の中では、自分の置かれている位置がはつきり意識していたはずである。彼が暗喩的な文體をもつ『史料小説』を利用し、自分の心情を吐露していたところは古丁と共通している。

『長安城の憂鬱』は唐代盛世を描寫することによって、かつて民族の榮えていた時代への熱い思いを表現した。『司馬遷』はたった四百字しかない短篇である。司馬遷が宮刑に處された後の憤懣やるかたない氣持ちを書いた。司馬遷を借りて、爵青は何を表現しようとしているのだろうか。『滿州國』で許された範圍内で文筆活動を行っているが、一人の中國人としては、どうにもならない屈辱に耐えなければならぬ。爵青の悲痛が感じられるのは、讀者側の理解としては筆者だけではないはずであろう。

第三章 雑誌『麒麟』の多様性

1. 女流作家の活躍

第一章で紹介したように、『麒麟』雑誌はその娛樂性を強調するために、表紙は全て美しい女性の肖像畫で飾られている。雑誌最初の三十數頁の廣告の中で、女性のための廣告が人目を引く。化粧品廣告がもつとも多い。日本製のものはそのまま日本語を使っている。美女の肖像とカタカナが互いに引き立ち、おしゃやかな感じさえ受ける。内容的に女性讀者を念頭に置き、家事、育児の知識、女優に關する逸話、女流作家の作品特集など、さまざまな角度から、女性を喜ばせる工夫をしていた。

最初に楊絮の存在は女性讀者にとってはおそらくなくてはならない存在であつたらう。彼女はけつしてめがねをかけている學術型の堅い女性ではない。作家よりもむしろ歌手、女優のほうが讀者にとって身近な存在だった。編集部はこうした大衆心理をうまくつかみ、彼女の日常生活は常に紙面をにぎわしていた。結婚式の寫眞及び記事は『麒麟』が大々的に報道していた。

華やかな一面を持ちながら、文筆活動も盛んにおこなった。『早秋の寂莫』（一九四一年、第一卷第四期）、『ある悲しい物語』（一九四一年、第一卷第七期）、『生活は流星の如く』（一九四三年、第三卷第十二期）、『すべてわたしが悪かったの』（一九四三年、第三卷第六期）などを執筆した。彼女は女性の繊細な感受性を生かし、女性の情緒をきめ細かく記し、さらさらと流れる文章からときたま、一縷の哀愁を感じさせた。

文壇の女性宿將吳瑛が発表した哀艶小説『欲』（一九四二年、第二卷第十期）は読みごたえのある作品である。

小説は女性知識人の目から見たでき事である。貧しい再婚同士。女性は男性に觸れられることを嫌がり、女性と女性の連れ子は日々虐待を受けている。これを目撃した近所の女性たちは、一様に女性に非があると言ひ、逆に、「女性は男性を喜ばせなければ、何の使い道があるのか」と同性から非難を浴びせられる。吳瑛はずばりと「性」の問題を提起した。男性を喜ばせられなければ、女性は男性の保護が得られないばかりでなく、同性からも軽蔑される。この事實は女性読者が深く考えさせられた問題であろう。

ほかに女流作家柳青娘（梅娘）『春は来た』（一九四三年、第三卷第二期）、憶瑩『往事』（一九四三年、第三卷第二期）、乞女『秋はあなたのものだ』（一九四一年、第一期第四期）、同じ號に瀾光の『情緒』があった。

『麒麟』の女性読者をターゲットにする戦略は、女性記事や女性作家の起用によってますますの成果をおさめたと言えよう。

2. 編集部だよりから見える娯楽性

『麒麟』雑誌は編輯長をはじめ、實力のある記者陣を有していた。彼らは時にはペンネームで登場し、時には、「編集部」という名前でユニークなコラムを執筆している。時局のニュースで暗くなった雰囲気をも

フトなムードに變える努力をしていることがよくわかる。

「編集部」からの一貫した決まったコラムはなかった。人気のあるコラムは數期続いた後、また別の名前のコラムに変更された。

ここで創刊號（一九四一年六月）から第一卷第九期（一九四二年二月）までの九冊を例として、編集部から出した主なコラムを見てみたい。

娯楽性を強調している『麒麟』は創刊號から第七期まで「麒麟新聞」というコラムを設けた。内容は一頁ないし數頁である。①珍聞版、②趣味版、③映畫版（期によっては、タイトルが違ふ）というタイトルがつけられていた。それぞれの記事は數行しかなかった。

もう一つ似たような「娯樂室」というコラムがあり、これが第九期まで続いた。創刊號の「娯樂室」の見出しに「妙趣に満ちている、絶對讀むべし」と書いてある。面白さを強調していた。

編集部は各種座談會の内容も掲載した。創刊號に「國民生活改善座談會」の記事があった。「政府官吏」や社會の「有識者」に國民の衣、食、住、行および儉約の重要性を説いてもらっている。第二期の「兒童生活座談會」は「新京」自強學校と萃文學校の小學生を集め、司會者のインタビューに答える形の座談會であった。司會者の「どんな科目が好きですか」という質問に對して、生徒たちは争って「日本語の授業が好きです」と聲を揃えて答える。司會者は「喜ばしい現象ですね。語學は感情を傳達する道具です。今後協和工作（『滿洲國』の建國理念——五族協和「筆者注」）にも役立ちますね」と言っている。この一幕は國策に沿った會話としか思えない。編集部は常に上からの厳しい檢閲の目を意識しなければならぬ。この細心の注意を拂う姿勢は雑誌のすべての號から感じられる。

「麒麟新聞」は第八期から姿が消え、「時局重大ニュース」とか「時局看板」が取って代わった。

時局の變化に伴つて、徐々に編輯部からの娛樂コラムは減り、座談會の内容も火藥の臭いの漂う「決戦」とか、「英米殲滅」のような内容になる。一九四四年〜一九四五年の間の『麒麟』を見ると、戦争の色が雑誌に色濃く投影されており、娛樂版を編輯する餘裕もなくなり、しまいに雑誌から完全に姿を消してしまつた。

以上取り上げたコラム以外に、知識、生活の智慧、讀者との對談などは、いずれも軽い氣持ちと短時間讀める讀み物であり、一部の記事は今の時代讀んでも、なお面白さが残つてゐる。

おわりに

『麒麟』は日本からの資金援助があつた。『滿州國政府』の力強い支持もあつた。

筆者は、これまで當局の宣傳道具に過ぎないという先入觀をもつてゐた。今回影印版を入手して、全卷を通して讀むことができたのは幸いだつた。新鮮な部分、面白い記事を次々に發見した。

最初に筆者の目に入つてきたのはカラフルな廣告であつた。資生堂のシャンプーや三塔クリーム、女性ホルモン——愛始萌（愛が芽生える）などである。女性讀者にとつては、恐らくもつとも心を躍らされたにちがいない。

通俗小説の大半は面白い。編輯部から思案した娛樂コラムは常に笑いをこらえきれない。さらに、漫畫、女優の寫真集……などがあつた。あらゆるところに氾濫している無味乾燥な時局小説に飽き飽きしていた大衆にとつては、『麒麟』の娛樂性は、干天の慈雨ではなかつただろうか。

筆者は本稿の執筆中に東北淪陷期文學の研究で名高い潘蕪先生から、『麒麟』はあくまでも漢奸文學だから、慎重に讀むべきだ」との忠告を

頂戴した。中國の學術界では、『麒麟』に向けている目が依然として厳しいような氣がした。筆者は侵略者やその追従者に賛歌を送るつもりは少しもない。しかしながら、ある種のイデオロギーで作家や作品を色分けすることもまた筆者の研究風格ではない。

『滿州國』の市民階級には勞働者もいれば農民もいる。小作人や事務員……さまざまな職業についた人がいたはずである。彼らは果たして時局の小説やハイレベルの純文學の小説に親しみを持てただろうか。答えは「否」である。彼らは社會問題や時事問題にあまり關心がなかつたはずである。それは彼らが「生きること」||「日常生活」に没頭していたからである。

それよりもむしろ彼らを引きつけたのは、享樂、市井奇聞に關する讀み物だろう。このような大衆讀者があつたからこそ、『麒麟』の言情小説、探偵小説、功夫小説、笑い話などが廣く讀まれたらうと思われる。

『麒麟』は『滿州國』の嚴しい文藝政策が敷かれる下で誕生した『政府』支援の大衆雑誌である。雑誌の中身から、イデオロギー問題に觸れさえしなければ娛樂を謳うことは比較的に自由だつたことがわかる。上から押し付けられた政治や時事問題を背負いながら一貫した娛樂性を堅持する姿勢にこそ『麒麟』の存在價值があつたと言えよう。

注

- ① 一九三二年九月十八日、瀋陽（當時奉天）北部の柳条湖の日本人による鐵道爆破事件。これを契機に、日本の中國東北部への侵略戦争が本格的に開始。翌年には、滿州國を樹立。
- ② 中日全面戦争の發端となつた事件。一九三七年七月七日、北京近郊盧溝橋付近で軍事演習中の日本軍が中國軍の銃撃を受けたとして、翌日に中國軍を攻撃し、兩軍が交戦してしまふ。
- ③ 胡適 周作人「五十年中國文學的變遷大勢」（『論中國近世文學』海南

出版社・1994年)所収、4頁。

- ④ 同3、7〜8頁。
- ⑤ 民間藝能の一種。演者は韻文で語り、時たま臺詞も言う。手にカスターネット、小太鼓を打ちながら、三味線の伴奏に合わせて歌う。
- ⑥ 劉曉麗「故郷が淪陥、文學はどうすべきか」(『中文自學指導』2006年第1期)、35頁参照。
- ⑦ 「藝文指導要綱」は一九四一年三月二十三日に『滿洲国』弘報處によって公布された。政府の文藝政策が示された規定である。
- ⑧ テクスト 第一冊 35頁。
- ⑨ テクスト 第一冊 178頁。
- ⑩ テクスト 第三冊 1446頁。
- ⑪ テクスト 第七冊 3212頁。
- ⑫ テクスト 第三冊 1273頁。『新年題辭』の内容は「高尚な趣味をもって、人生を潤わせ、性格を陶冶せよ」である。

- ⑬ テクスト 第五冊 2339頁。
- ⑭ テクスト 第一冊 6頁。
- ⑮ テクスト 第五冊 2238頁。
- ⑯ テクスト 第五冊 2246頁。
- ⑰ テクスト 第六冊 2851頁。
- ⑱ テクスト 第一冊 67頁。
- ⑲ テクスト 第一冊 291頁。

テクスト 民國珍稀期刊『麒麟』(全國圖書館文獻縮微複製中心・2006年7月)計13冊(44期)總頁數6788頁。引用部分は總頁數に従って記した。

(大谷大學文學部准教授)